



# 朝日にあたる川

赤貧にっぽん釣りの旅二万三千キロ

真柄慎一

*Shinichi Magava*

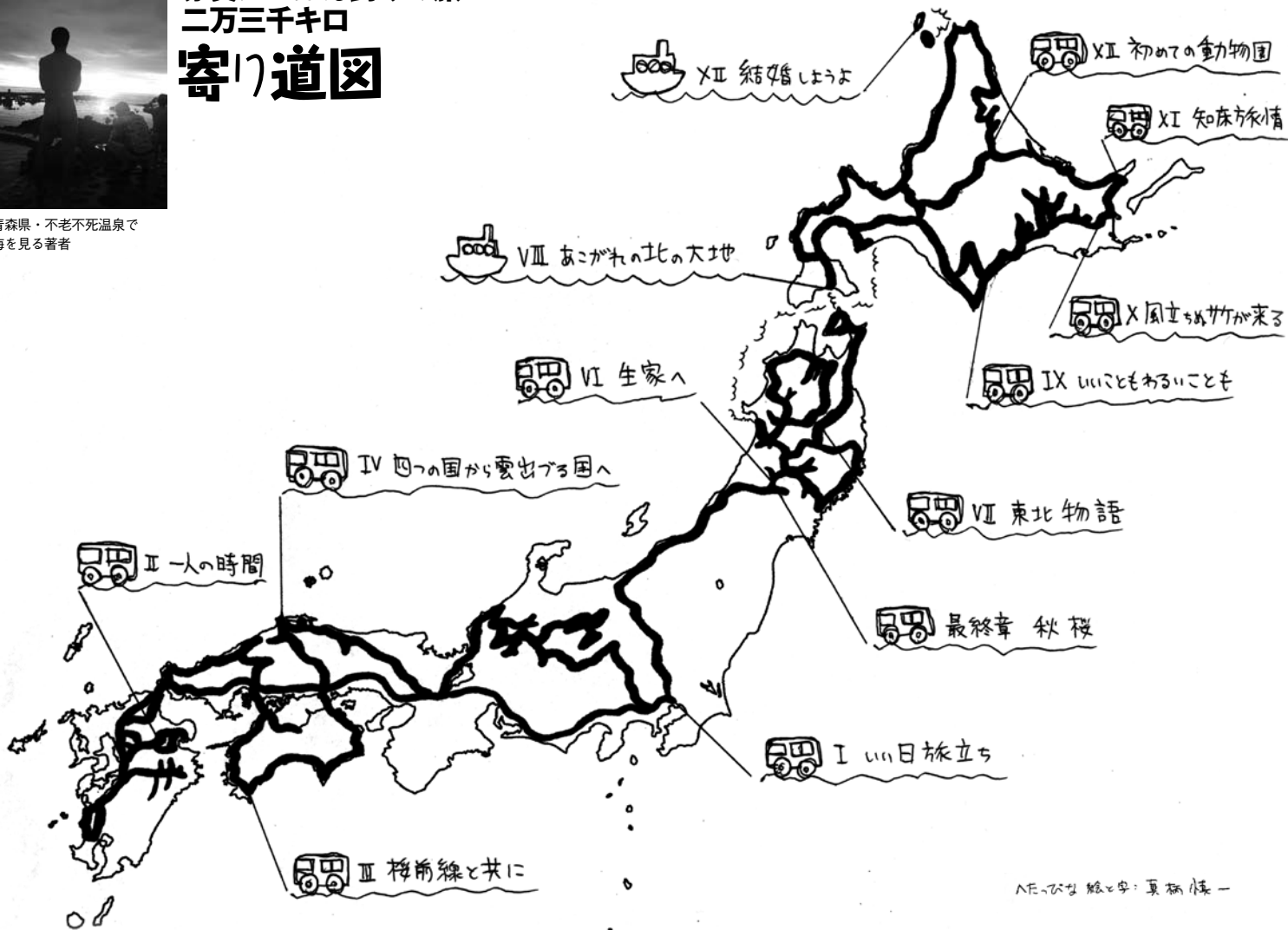
フライの雑誌社





青森県・不老不死温泉で  
海を見る著者

# 赤貧につぼん釣りの旅 二万三千キロ 寄り道図



## 朝日のあたる川 赤貧にっぽん釣りの旅 二万三千里 目次

### I いい日旅立ち 東京・中野 008

上京はしたけれど／世界が変わった／釣りのために働け日々／釣りをしながら日本を一周したい／エミとの出会い／オノボロ軽ワゴンを改造する／六〇人の前で涙を流す

### II ひとりの時間 熊本・鹿児島・福岡 020

西へ向かって／「旅に行かないで。」(エミ)／旅の間の六つのルール／三月三日 山中、雪が舞う／三月三日 家のないおばちゃん／三月四日 初釣りてボウズ／三月五日 おじいさんに怒られる／三月六日 あたたかいユラフ／三月七日 こんなに幸せでいいのかな／三月一〇日 先輩の実家で歓迎される／三月一〇日 エミが来た／三月一五日 極上の温泉／四月八日 コギの棲む川へ

### III 桜前線と共に 山口、島根、広島、高知 034

四月九日 いい釣りした後は／日々の酒と 週間の食生活／毎日ご飯を炊く／夜はフライを巻く／四月一三日 残雪の川で／四月一六日 初めてのカーフェリー／原爆ドームでキマヤ／あたたか／四月一六日 四万十川で／大丈夫 大丈夫

### IV 四つの国から雲出づる国へ 高知、岡山、広島、島根 038

八月二日 センターラインの上に／八月四日 ブラウンも大きい／八月六日 なんの肉かわかるか／八月七日 フラスト・キャストで決めないと／八月一〇日 北の国ソング／八月二二日 馬を見てエミを思い出す／八月一四日 日高山脈を越えて

### IX こんごもむわるこんごも 北海道 150

八月一七日 お前、バトカーに乗れ／八月一七日 十勝が好きだ／八月一八日 変哲もない川で／うわっ、うわあ！／八月一九日 アイヌコタン、彫り込んだ時間／九月一日 大瀬原と釧路川／屈斜路湖で混浴せず

### X 風立ちぬ、サケが来る 北海道 168

九月二日 街中の川で／大きい、大きい、大きい／九月三日 トドワラで思う／九月四日 似た者どうし／九月五日 あなたの釣りを見てください／北海道ならではの釣り新聞、釣り雑誌／九月七日 カラフトマスがやって来た

### XI 知床旅情 北海道 184

あたしに子供がいたら／エサはサンマを使え／ご飯食べてきなさい／九月一〇日 羅臼とウマが合う／地元民と露天風呂／見たことのない魚を／ネオンの街でひとり／九月二二日 いた、いた、いたっ！

四月二〇日 暮末の志士になる／四月二二日 食べるのは苦手／四月二三日 午前二時、砂にはまる／もつとゆっくり釣りしなさい／四月二五日 同行二人／旅で使った釣り道具たち／四月二九日 神々の集まるところ

### V 旅と釣りと僕とエミ 島根、島根、京都 074

五月三日 マツ君の家で／原点の釣り／五月四日 たまにはお金のことも考える／五月五日 釣り人生、最高の舞台／大きいの中くらいの、小さいの／五月一〇日 「もしもし、エミです。」／五月一日 二度目の修学旅行／五月二日 九頭竜川のサクラマス／五月二五日 熱きころ、守る人／五月二八日 うなぎも酒も／二九歳になった／六月一日 期待の東北へ

### VI 生家へ。山形、秋田、青森 094

六月三日 真柄家の人々／親父の本音／六月二日 新緑ヤマメ／主を狙う／食え、食え、食え／お前、まだそこにいるのか／六月二日 タケコ登場／うどん食わせろっちゃん、我が家にテレビがやって来た／七月一日 クマに遭う／七月三日 白神山地の神様へ

### VII 僕の遠野物語 秋田、青森、岩手 116

七月四日 大惨事発生／スベアもバンク／森が最高だから／七月七日 もうひとつの天の川／七月二二日 念心の釣りがつづく／そしてついに／七月一六日 どんとばれ／カッパとビールとモンカゲロウ／七月二七日 下北半島から北海道へ

### VIII あこがれの北の大地 北海道 134

八月二日 センターラインの上に／八月四日 ブラウンも大きい／八月六日 なんの肉かわかるか／八月七日 フラスト・キャストで決めないと／八月一〇日 北の国ソング／八月二二日 馬を見てエミを思い出す／八月一四日 日高山脈を越えて

### XII 初めての動物園 北海道 204

九月二日 その細い棒はなに／この喜びを皆さんに／筋子はその子／釣りにルールはいらない／九月一七日 オホーツク海岸を北上する／旭山動物園に行きたいの(エミ)／白いクマと黒いクマ／ふたたび、北へ

### XIII 結婚しようよ 北海道、山形 226

九月二日 僕は僕のポイントへ／幻の魚、イトウ／九月三日 礼文・利尻が呼んでいる／何とかなるさ／どこまでおめえはどこの子だ／パフンウを食べたい／九月四日 二九歳、男泣き／九月二七日 さらは北海道／九月二九日 実家で正座する

### 最終章 秋桜 山形 226

漁師じゃないってば／えっ、もう終わったの？／本当に終わったんだ／九月三〇日 ふるさとの川

### あとがき ずっと先の新しい夢を見ている 258

### 解説 水の巡礼 渡辺裕一 260



# I

## いい日旅立ち

東京・中野

春。

上京してから10回目の桜が散っていった。

僕はあることを決意した。

上京はしたけれど

地元・山形の高校を卒業した僕は、すぐさま東京へやって来た。就職も決まらず住む所さえ決めず、ただ大きな夢ばかり持って、新幹線に乗り込んだのが懐かしい。持ち得る音楽機材だけを手にして東京駅に降り立った僕の夢は「ミュージシャン」だった。

歌以外の楽器には少々の自信があった。しかしそれは、小さな町の小さな世界で単にチャホヤされただけのものであった。東京へ来てからすぐに、僕の音楽の薄っぺらさ、限界を知ることになる。

本来ならば、そこから努力するものだとも思う。しかし鼻高々で上京した生意気な少年は、努力とは格好の悪いものだと思いついて、さらに悪いことに周りのせいにもしてしまっていた。本当は心が折れた弱い若者だったが、それを隠すことだけに必死になっていた。

ダラダラと過ごした三年は、長い長い年月だった。自分の才能を過信し過ぎた散々な結果に、音楽で生活するのはスツパリとあきらめることにした。今思えば、よくありがちな話である。

田舎に戻るという選択もあったが、東京での生活もようやく楽しくなってきた頃だった。そして何よりちっぽけなプライドが、田舎へは帰らない、いや帰れない大きな理由だったと思う。

熱くなるものが無くなった僕は、ふと釣りがやってみたくなった。上京する以前は、毎日のように川で遊んでいたのを思い出したのである。そして、もう一つ思い出したことがあった。それが、山形の

川で小学生のころにたまたま見た釣り、フライフィッシングだった。

あまりにも優雅で美しいキャストイング（フライフィッシング専用の釣り糸「フライライン」を操って毛バリを飛ばすこと）に、子どもの僕は一瞬で心が奪われた。ドキドキし過ぎて気持ちが悪くなるほどに興奮したので今でも覚えている。またそれは、自分が初めて目にした「大人の遊び」だった。田舎の少年は恥ずかしがり屋である。その釣り人に声をかけることもできず、遠くから見つめるだけで精一杯だった。

世界が変わった

さて。まずは道具を揃えることから始めた。僕の部屋から、音楽機材がどんどんなくなっていく、かわりにフライフィッシングの道具が増えていく。毛バリを自分で巻くフライタイイングも始めた。最

初の一本はエルクヘアカデイス。ら旋状に伸びるハックル（ワトリの羽）にはとてもピツクリさせられた。はじめてエルクヘアカデイスを巻いた時、フライフィッシングは大人のための大人の遊びだと改めて認識した。一気に百本巻いてみた。半分の五〇本はうまく巻けた。そこから中に転がるエルクヘアカデイスの山には、釣れそうなのと釣れなそうなのが何となく見てとれた。

山形へ帰省する用事にかこつけ、解禁日に地元のK川へ立った。とけかけた歩きづ



らい雪の上を、目当てのブル(淵)目指して進む。子供の時からよく通い、たくさんの思い出が詰まった一番好きなこのポイントを、僕のフライフィッシング・デビューの場所として選んだ。

ブルではもう、ヤマメのランチタイムが始まっていた。この日のために巻いたミジジューバ(エスリカなどのサナギを模したフライ)を糸に結ぶ。こんなに小さいハリ、自分にも見えないし、魚にも見えないだろうと、僕は思っていた。しかし僕の下手なキャストイングでフライがとんでもない所へ落ちて、魚の方から見つけてくれた。ライズ(魚がエサを食べに水面へ出てくること。またはその波紋)がなくなるまでの一時間、ひとつのブルで五尾ものヤマメを釣ることができたのだ。僕の中で釣りの世界観が変わった瞬間だった。

釣りのために働く日々

それからは一気にフライフィッシングへはまった。東京へ戻るとまず、いつでも釣りにいけるように、アルバイト先を休日の多い仕事へと変えた。早朝にキャストイングの練習をしたいために、夜間労働者になった。

それはハッキリと釣りのために働いているようなものだった。都内のアパートから電車を乗り継いで、週に四日も山梨の川へ立ったこともあった。着替える時間があったいなので、ウエーダー(釣り用の長靴)を履いたまま中央線に乗ったこともある。電

ミジジューバ



車で行けない釣り場へはお金がないのにレンタカーも使った。このころの自分の行動は異常ではないとは思いますが、普通でもないように思う。

そのころ、フライショップ『LOOP TO LOOP』店主の横田正巳さんと出会った。横田さんはタックルの説明から川・湖・海に至る幅広いフィールドの案内まで、とにかく親身になって相談に乗ってくれた。特に熱心に教えてもらったのがキャストイングだった。初めて横田さんのキャストイング・デモンストレーションを見たとき、こんなに美しく力強いラインを飛ばす人がいたのかと衝撃を受けた。それからは、夜勤明けの重たい体を引きずりほぼ毎日、近くにある公園へ通った。キャストイングがうまくならない。ただそれだけのために、とにかく投げまくった。

僕のラインは少しずつ伸びていった。しかし、練習量に対しての自分の上達の遅さには、納得がいかなかった。そこでビデオカメラで練習風景を撮影した。ビデオカメラを三脚に立てて置き、ちょっと離れてキャストイングする。それを毎日撮って毎日反省する。良いところ悪いところは映像になればすぐに分かる。これはやって良かったし、実に面白かった。

もう一つ面白かったのが、公園を散歩中のおばさんが不思議そうにカメラを覗き込む顔が映っていたり、幼稚園児に「何やってるの?」と囲まれてオドオドしている僕が映っていたりしたことだ。苦しい時もあったが、毎日が充実していて楽しい日々だった。

この頃よく周りの方に、「何のためにそこまでやるの？」と聞かれた。理由など何もなかった僕は「ただとりつかれているだけです。」と答えた。この言葉しか出なかったし、まさにそうであった。

「釣りをしながら日本を一周したい」

釣り中心の生活を送っているうちに、僕は二七歳になっていた。この歳で焦ったのではもう遅いが、少しずつ将来のことも考え始めていた。その頃、J R中野駅近くで串焼屋を始めた尊敬する先輩、遠山さんから声を掛けてもらった。「うちの店に来ないか？」。

僕は正直に嬉しかった。よくお酒をご馳走してもらったり、釣りも一緒にさせてもらった仲である。よき理解者であり、兄貴のような存在であった。遠山さんの下ならば厳しくても楽しくやっていけると思った。飲食店でのアルバイトは初めての僕は、遠山さんの気持ちに応えたくて無我夢中で仕事に打ち込んだ。釣りに行けない日々が続いたが、充実した毎日にも不満はなかった。

ある日、遠山さんから「週に一日、店を一人でやってみないか。」と誘ってもらった。認められたのは嬉しかったが、僕に出来るのかという不安があった。それにここで引き受けてしまうと本当に釣りから遠ざかってしまう。僕は言った。「二週間考えさせてください。」

僕はそれまでの人生で初めてというほど、悩んだ。仕事はやりがいがあり、親方にも恵まれている。

自分の将来を考える上でも最高のフィールドだとも思う。何一つ断る理由などない。しかしすぐには返事が出来なかったのはなぜだろう？ 何かに悔いを残しているからか。だから飛び込めないのか？ 漠然と思っていたことが、僕の中でどんどん大きくなってきた。ずっと昔から思っていたこと。誰にも言っていなかったこと。すでに諦めかけていたことだった。

――一週間後。遠山さんに相談してみた。

「釣りをしながら日本一周の旅をしたい。」

遠山さんに何を言われるかは想像もつかなかった。僕は言葉を続けた。

「来年の三月に出発したいので今年いっぱい仕事を辞めさせてください。いいえ、こんな半端な気持ちで仕事をするのは苦しいので、今すぐにでも辞めさせてください。」

一週間考え抜いた結論だったが、言ったそばから、とても自分勝手だとも思った。

しかし遠山さんはすぐに、

「お前の旅を応援する。今年いっぱい頑張ってくれ。」

と言ってくれた。ゆっくりとあたたかい言葉だった。我慢して我慢していた大粒の涙が一つこぼれた。それからはよりいっそう仕事に努力した。釣りに行くのも我慢してとにかく働いた。何とかお店のためになりたかったのと、何より今僕には旅の資金として一〇〇万円を貯めるという大きな目標があった！



## エミとの出会い

慣れない仕事に四苦八苦していた頃、一人の女性が同じ職場に入ってきた。歳は五つも下でそのわりに僕よりもしつかりした子。飲食店勤めの経験も長く、色々な仕事を教わった。名前はエミと言った。苦楽を共にすると親近感が湧いてくるものだ。休日や仕事終わりによく会ったり、呑んだりするようになった。この頃は、かわいい妹分ができた嬉しかったし、とても楽しかった。

新しい年になった。仕事を辞めて時間に余裕ができた僕は、前にもましてエミと長い時間を過ごすようになった。この辺りからハッキリと僕の気持ちに変化が現れた。妹分として見られなくなっていた。しかし三ヵ月後に旅に出してしまう僕は、その思いを伝える立場になかった。僕には仕事もなく、住む所さえもない。何も約束のできないやつが想いを伝えることはズルイとも思ったし、卑怯だとも思った。旅を終えて、東京へ戻って来た時。気持ちが変わっていないのなら、その時に伝えようと思っていた。旅に出てもずっと好きでいられる自信もあった。

近所の神社へ、二人で初詣に行った。僕は旅の安全とエミを好きでいられることを願った。

その帰り道、突然エミから、

「私のことどう思っている。」

と聞かれた。僕はビックリした。そして精一杯のひとことが出た。

「真剣に考えている。」

正直に好きと言えない立場を理解してくれたのか、エミは間髪入れず「嬉しい。」と言ってくれた。「ずっと前から好きだった。」とも言ってくれた。

僕たちは今後のことを真面目に話し合った。理解し合い、付き合うことになった。旅から帰ってきたら、なるべく早いうちに結婚しようと約束した。エミは、「ずっと待っているから。」と言ってくれた。

## オンボロ軽ワゴンを改造する

旅の準備を急いだ。まずは車を購入しなくてはならない。

目標の資金額には残念ながら届かなくて、車の価格も低目に設定せざるを得なかった。また問題が浮上した。考えれば当然なのだが、車を買うには車庫証明が必要だった。使わない駐車場の代金を毎月払うわけにはいかない。僕はいま住んでいる都内のアパートも引き払うのだ。東京で車を買うのは諦め、実家のある山形で車庫証明を取ることにした。山形に住んでいる父親に、週に一回のペースで僕の希望に合いそうな中古車を紹介してもらおう。しかしこれがなかなかどうにも決まらない。

時間はどんどんなくなっていく中、ギリギリの二月中旬。一台の商業車ベースの軽ワンボックスが見



つかった。年式は古く、走行距離もすでに八万八千キロメートル。しかも車検がその年の九月下旬までと条件は良くなかったが、とにかくお金と時間がなかった。

車検に関しては九月までに旅が終わらなかつた場合、その土地で受けてしまうという強行作戦に出ることになった。すぐに山形へ車を取りに行き、東京へ持ち帰った。そのまま釣りの大先輩である大城さん宅まで持って行き、旅仕様に改造だ。

まずは後部座席を全てフルフラットにした。そこに収納BOXを置いて天板を敷いた。寝床を確保し、さらにテールも置いた。これで生活スペースはバッチリ。エンジンを切っても電気が使えるようにと、サブバッテリーも搭載した。大城さんにほぼ全てをやってもらい、旅仕様の車が出来上がった。軽ワンボックスの狭いスペースで、寝床、収納、読み書き、タイピング、食事スペースを全てクリア。家庭用電源もOKで、電子炊飯ジャーも使えるのである。

小さなキャンピングカーと言っても間違いはない、完全な仕上がりだった。

#### 六〇人の前で涙を流す

出発まであと一〇日余りとなった頃。エミにある居酒屋へ呼び出された。時間通りに行くのと、そこには六〇名もの方々が集まっていた。

いつも親しくお付き合いしてもらっている顔ばかりだった。串焼屋のお客さん、釣りの先輩方、親友たちが僕の壮行会を開いてくれた。すでに涙があふれそうだったが、トイレに行つて何とかごまかした。もう胸がいっぱいだった。

その会で様々な餞別をいただいた。信じられない大金や釣り竿、リール。この時から僕の旅は一人ではなく、皆の思いを背負つての旅になると思つた。最後に遠山さんから熱いひとことをいただいた。今まで我慢していた涙が一気にあふれ出てきた。こんなに大勢の前で涙したのは初めてだった。

東京・中野はあいにくの雨。僕は気にならなかつたが、エミは「なにもこんな雨の日に出発しなくても。」と不安そうだった。

行き先は決まっている。三月上旬。もちろんマツチ・ザ・ハッチ（水生昆虫の羽化に合わせたフライフィッシング）が面白い。熊本県、阿蘇白川へ向け、前だけを向いた。